

TZ ほんの窓

第 5 号 (2005.3.22) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

< 帝国 > の 展 開

<帝国>は、さまざまな反響を巻き起こしています。

<帝国>とは、もちろん 2000 年に出版されたネグリ/ハートの<帝国>です。

ネグリ/ハートは<帝国>は、合衆国そのものではない、としながらも、しかし、9.11 以降のアメリカ合衆国を分析する用語としての「帝国」との不思議な交叉や合流を見せています。

「帝国」という用語を使った文献もかなりの数が出ていますが、ネグリ/ハートの<帝国>から、帝国主義論の系譜を踏まえたもの、ローマ帝國的な単なるイメージとして使っているものまで種々様々です。

今回の、高本善四郎氏助成図書コーナー小展示では、各国語に翻訳された<帝国>と、<帝国>に(多かれ少なかれ)影響を受けて出版されたものを中心に、紹介します。

(1) < 帝国 >

帝国：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性 / アントニオ・ネグリ，マイケル・



ハート著；水嶋一憲 [ほか] 訳 [2003 年，以文社] 【3190:1165】

Empire / Michael Hardt, Antonio Negri

[2000, Harvard University Press] 【3110:402】

[2001,] 【3110:692】

「しかしながら、私たちは「<帝国>」という言葉によって、「帝国主義」とはまったく異なる事態を指し示している。」

「<帝国>が、私たちのまさに目の前に、姿を現している。...市場と生産回路のグローバル化に伴い、グローバルな秩序、支配の新たな論理と構造、ひと言でいえば新たな主権の形態が出現しているのだ。<帝国>とは、これらグローバルな交換を有効に調整する政治的主体のことであり、この世界を統治している主権的権力のことである。」

「グローバル化のプロセスと新たな世界秩序に対して支配力を揮っている究極的な権威の場を、合衆国に特定しようとする者は大勢いる。」

「しかしながら、私たちの見解はそれらとは反する。」

「なるほどたしかに、合衆国は、<帝国>のなかで特権的な位置を占めてはいる。だが、その特権は、かつてのヨーロッパにおける帝国主義的列強との類似性に由来するものではなくて、そうした列強との諸々の差異に由来するものなのだ。」

「本書の中心部分では、...帝国主義から<帝国>への移行というストーリーが語られている。」

(<帝国>序文より)



「帝国」をめぐる五つの講義 / アントニオ・ネグリ著 ; 小原耕一, 吉澤明訳 [2004, 青土社]【3110:678】

原題は『ガイド』。2002年にコンゼツァ・アルヴァカータ大学の社会学研究所で行われた五つの講義に、<まえがき>を加えたもので、<帝国>をめぐるいくつかの論点を発展させたもの。

「構成的権力」「マルチチュード」といった"ネグリの用語"の『ガイド』となっている。

<帝国>への一番の批判は、"9.11"を説明できない、というものだったが、五つの講義の前に置かれたダニーロ・ゾーロ(Danilo Zolo 1936- 現フィレンツェ大学教授)との対話はそれへの応答とも言える。

また、「『帝国』は21世紀の『共産党宣言』か?」(スラヴォイ・ジジェク)とも言われるが、本書では、マルクスの『経済学批判要綱』との対比で<帝国>を論じている。

【関連書】

・マルチチュードの文法 : 現代的な生活形式を分析するために / パオロ・ヴィルノ著 ; 廣瀬純訳[2004, 月曜社]【3110:691】

(2) アメリカ"帝国"

<帝国>では、"主権"が国民国家から<帝国>へと移行しつつあり、<帝国>は合衆国そのものではない、と論じている。けれども、アメリカは帝国主義的に振る舞っており、"アメリカ帝国"を形成している、という議論も多い。

これらは、9.11以降、あるいは、それ以前からの"アメリカニズム"を説明するには、19世紀的帝国主義とは違う"新しい帝国主義"である、とはしながらも、やはり帝国ないしは帝国主義という概念を用いるのが"便利"なようである。



軽い帝国 : ポスニア、コソボ、アフガニスタンにおける国家建設 / マイケル・イグナティエフ著 ; 中山俊宏訳 [2003, 風行社]【3190:1471】

ボスニア、コソボ、アフガニスタンでのアメリカの「帝国の事業」としての国家建設が描かれている。

"新しい帝国は、過去の帝国のように、植民地と征服の上に建設されたものではない。それは、植民地を持たない覇権国であり、直接統治の重荷と日々の警備のリスクを伴わないグローバルな勢力圏を手に入れた帝国、つまり軽い帝国である"

ここだけを見ると、ネグリ/ハートの言う <帝国>と似ているが、イグナティエフの「軽い帝国」はアメリカである。イグナティエフ自身は、「帝国という言葉、アメリカを非難する言葉として使うことには興味がない」といい、ブッシュ政権のイラク戦争を支持もしている。アメリカが圧倒的な力を持つ「軽い帝国」であることを前提に、それをどう使えばよいか、ローマ帝国衰亡の轍を踏まないためにどうすればよいか、という立場からかかっている。



新「帝国」アメリカを解剖する / 佐伯啓思著 [2003, 筑摩書房]【2500:192】

"アメリカ帝国"は圧倒的な軍事力を背景としているものの、それだけでは「帝国」たり得ない。「アメリカニズム」をキーワードに、フランシス・フクヤマ「歴史の終焉」、ハンチントン『文明の衝突』、リッツァ『マクドナルド化する社会』など広範

な文献を参照しつつ、「アメリカ帝国」をその建国の理念にまで遡り検討している。

「アメリカニズム」とは「端的にいえば、自由や民主主義、市場経済などという現代のアメリカ的価値の普遍性を信奉し、それを世界に普遍化できるという考え」であり、それが「アメリカ帝国」の基底を形作っているとしている。

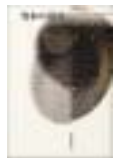
【関連書】

- ・ 帝国とその限界：アメリカ・東アジア・日本 / 白石隆著 [2004, NTT 出版] 【3190:1434】
- ・ 自由の帝国：アメリカン・システムの世紀 / アルフレード・ヴァラダン著；伊藤剛，村島雄一郎，都留康子訳 [2000, NTT 出版] 【2500:183】
- ・ アメリカ帝国の基礎知識 / ATTAC フランス編著；コリン・コバヤシ [ほか] 訳 [2004, 作品社] 【3190:1491】
- ・ 帝国(アメリカ)の支配/民衆(ピープル)の連合：グローバル化時代の戦争と平和 / 武藤一羊著 [2003, 社会評論社] 【3190:1332】
- ・ インチキな反米主義者、マヌケな親米主義者 / ジャン=フランソワ・ルヴェル著；薛善子訳 [2003, アスキー・コミュニケーションズ] 【3190:1492】
- ・ 論理なき帝国 / マイケル・マン著；岡本至訳 [2004, NTT 出版] 【3190:1490】
- ・ 浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ：世界史の中のアメリカニゼーション / 油井大三郎，遠藤泰生編 [2003, 東京大学出版会] 【2500:171】
- ・ 砂上の帝国アメリカ / 佐伯啓思著 [2003, 飛鳥新社] 【2500:174】
- ・ アメリカ帝国主義成立史の研究 / 高橋章著 [1999, 名古屋大学出版会] 【2500:132】

(3) 帝国と"グローバリゼーション"

グローバリゼーションが、「主権」を諸国民国家から<帝国>へと移行しつつある、というのがネグリ/ハートの<帝国>での議論の一つである。

"「グローバリゼーション」という荒波は、多くの場合、その震源地が米国であるため、一種の「アメリカニゼーション」であると受け止められ"(浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ：世界史の中のアメリカニゼーション / 油井大三郎，遠藤泰生編)ていることから、それが『帝国への挑戦』という形で、『もうひとつの世界は可能だ』という"運動"を巻き起こしている。



資本の帝国 / エレン・メイクシンズ・ウッド著；中山元訳 [2004, 紀伊國屋書店] 【2090:279】

"グローバルなものとなった世界では国民国家が死滅しつつあるという主張も耳にするが、皮肉なことに新しい帝国主義はグローバルな秩序を維持するために、これまでになく複数の国民国家で構成されるシステムを必要としているのである。" など、随所で名指しを避けつつも、<帝国>で論じられているような、主権の移行とか国民国家の衰退とは逆の事態が進行していることを指摘している。

また、「現在のグローバリゼーションとは、従属国の経済を開放させ、帝国の資本の影響をうけやすくしておきながら、帝国の経済はできるだけその逆効果をうけないように保護しておくことにほかならない」としている。



帝国への挑戦：世界社会フォーラム / ジャイ・セン, アニタ・アナンド, アルトゥーロ・エスコバル, ピーター・ウォーターマン編 ; 武藤一羊, 小倉利丸, 戸田清, 大屋定晴監訳 [2005, 作品社] 【3090:462】

2001年のポルト・アレグレ以来三回に亘るフォーラム、2003年のハイデラバードのアジア社会フォーラムなどでの議論についてまとめ、2004年のムンバイでの世界社会フォーラムに合わせて刊行された。マイケル・ハートは、別の論文で、世界社会フォーラムを20世紀の中葉を揺るがせた巨大な非同盟運動になぞらえている。



再魔術化する世界：総力戦・「帝国」・グローバリゼーション：山之内靖対談集 / 山之内靖著 ; 伊豫谷登士翁, 成田龍一編 ; 成田龍一[ほか述] [2004, 御茶の水書房] 【3000:1200】

"対談という形式をとった社会科学の入門書である"と謳ったこの本の中で、ネグリ/ハート<帝国>を、"場所論"のテキストとして一章を割き、丸山眞男や網野善彦などを引きながら、<帝国>について論じている。

また、"『構成的権力』から『帝国』へと大きな著作が連続して書かれていくときに、マキアベリが決定的な手がかりになっている"、"ネグリはマキアベリを通して、ローマ帝国の歴史的な特性を独特な形で論じたポリュピオスに絶えず参照の目を向ける。ポリュピオスの帝国論が、この『帝国』という著作の一つのベースになっている"と<帝国>を読み解いている。



グローバリゼーションから軍事的帝国主義へ：アメリカの衰退と資本主義世界のゆくえ / 大西広著 [2003, 大月書店] 【3190:1272】

"帝国主義の最高の段階としてのグローバリゼーション"(いうまでもなく、レーニンの『資本主義の最高の段階としての帝国主義』のもじり)をモチーフに、グローバリゼーションを検討している。

いわゆる"グローバリゼーション論"も、ネグリ/ハートの<帝国>を含む"反グローバリゼーション論"も、「強いアメリカ」「アメリカ主導のグローバリゼーション」をその前提として共通認識になっている。しかし、その前提条件も、帝国主義論に従えば、一時代の現象に過ぎず、"アメリカの主導性は不均等発展の法則により揺らいでいる。その中で国家間の紛争が絶えず、グローバリゼーション過程自体もそうした支配者の地位の争奪戦である。"としている。

【関連書】

- ・オルター・グローバリゼーション宣言 / スーザン・ジョージ著 [2004, 作品社] 【3090:456】
- ・グローバリゼーションの文化政治 / テッサ・モーリス=スズキ, 吉見俊哉編 ; A. アクソイ [ほか] 著 [2004, 平凡社] 【3000:1216】
- ・もうひとつの世界は可能だ：世界社会フォーラムとグローバル化への民衆のオルタナティブ / ウィリアム・F. フィッシャー, トーマス・ポニア編 ; 大屋定晴 [ほか] 監訳 [2003, 日本経済評論社] 【3336:351】